



ゆるやかに死者忘れゆく鳥曇
 お辞儀する鴉にお辞儀返す春
 夕空に始まる明日や種案山子
 朧夜の魚の釜に籠る音
 両の眸はさしぐむために弥生尽
 つちふるや弾薬箱に背負紐
 残雪へ轟く地鳴り倒の儀
 傘寿この意気を保たん桜東風
 連翹や父母は永遠にと思ひし日
 一生は一瞬千本桜さく
 空いつぱいに広がる桜ほどの悲しみ
 病む者に小さな一歩道乾く
 梅子の黄なる古屋に戻り来ぬ
 矢部正之

白べいかの額ふくらむ養花天
 添田朋子
 連翹が田圃の脇を固めけり
 西澤日出樹

人生を決むる名前や山桜
 現世をかきたて貨車や残る鴨
 春の鬱もぐらの穴がぼんぼん
 剛から柔へ春雪の山容チ
 卒業証書丸めて覗く天守閣
 春泥を舐めたさうなる園児たち
 野焼してぴんこしやんこや阿蘇の牛
 身ひとつといふ約やか鳥雲に
 桜満つ嗚呼バンドゥラ・バラライカ
 中庭の桜を愛づる吾はふたり
 春北斗生きるにいつも綱渡り
 古畑富美江

芝居打つことが反戦吉里吉里忌
 瀬野史
 蝶々の美容室より出で来たり
 宮澤朝子
 夕刊が午後と夕方分けて春
 遠藤洋子
 朧夜やまさかの報せ派遣切り
 丸山盛久